



TITLE:

大明令解説

AUTHOR(S):

内藤, 乾吉

CITATION:

内藤, 乾吉. 大明令解説. 東洋史研究 1937, 2(5): 439-465

ISSUE DATE:

1937-06-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138758>

RIGHT:

大明令解説

内藤 乾吉

一 明令の撰定・頒行

明令は明朝最初の律と俱に太祖の吳元年に撰定され、翌洪武元年頒行された。その撰定の始末は種々の書に記されてゐるが、多くは明太祖實錄の記事に本づいたものに過ぎぬ。因つて——實錄の記事が必ず正確といふ譯ではないが——先づ實錄の文を左に掲げる。

京師帝國大學藏本及び宮内省圖書寮藏本に據る。兩本は一二文字の異同あり、○を附す。李王家藏本のこの條が朝鮮總督府中樞院編「李朝法典考」七七頁に引かれてゐるが、誤脱が多い。

（吳元年冬十月甲辰朔）甲寅……命中書省定律令。以左丞相李善長爲總裁官。參知政事楊憲・傅瓛、御史中丞劉基、翰林學士陶安、右司郎中徐本、治書侍御史文原吉・范顯祖、經歷錢用壬、監察御史盛原輔・吳去疾・趙麟・崔永泰・張純誠・謝如心、大理卿周禎、少卿劉惟敬、大理丞周湏、評事陳敏・孫忠、按察使李祥・潘黼・滕毅、僉事程孔昭・傅敏學・正藻・遼永貞・張引・吳彤爲議律官。初上以唐宋皆有成律斷獄。惟元不做古制。取一時所行之事爲條格。胥吏易爲奸弊。自平武昌以來。卽議定律。至是臺諫已立。各道按察司將巡歷郡縣。欲頒成法。俾内外遵守。命善長等詳定。諭之曰。立法貴在簡。當使言直理明。人人易曉。若條緒繁多。或一事而兩端。可輕可重。使奸貪之吏得以貪緣爲奸。則所以禁殘暴者反以賊良善。非良法也。務求適中。以去煩弊。夫網密則水無大魚。法密則國無全民。卿等宜盡心參究。凡刑名條目。逐日來上。吾與卿等面

議。斟酌之。庶可以爲久遠之法。

圖書寮本李祥作李詳。京大本賊誤賤。遂誤遂。

(吳元年十二月癸卯朔)甲辰律令成。命頒行之。初命李善長等詳定律令。上每御西樓。召諸議律官及儒臣。皆賜坐講論。以求至當。謂起居注熊鼎曰。吾適觀群臣所定律令。有未安者。吾特以一己意見決之。而衆輒以爲然。鮮有執論。蓋刑法重事也。苟失其中。則人無所措手。足何以垂法後世。鼎對曰。主上參於群議。斷以睿見。誠爲允當。請俟書成。更與廷臣看詳。而後頒之。上然其言。及是始成。上與廷臣復閱視之。去煩就簡。

減重從輕者居多。凡爲令一百四十五條。吏令二十。戶令二十四。禮令十七。兵令十一。刑令七十一。工令二。律準唐之舊而增損之。計二百八十五條。吏律十八。戶律六十三。禮律十四。兵律三十二。刑律一百五十。工律八。命有司刊布中外。善長等賜物有差。儒臣京大本作儒官。唐圖書寮本作官。

上又諭群臣曰。讀書所以窮理。守法所以持身。故吏之稱循良者。不在於威嚴。在於奉法循理而已。卿等既讀書。於律亦不可不通。大抵人之犯法者違理故也。君子守理。故不犯法。小人輕法。故陷重罪。今卿等各有官

守。宜知所謹。

罪圖書寮本作刑。

明の太祖は至正二十三年その大敵陳友諒を鄱陽湖に破り、翌二十四年正月には吳王の位に即き、百官を建て、二月には陳友諒の子陳理を武昌に降して、湖北江西を平げ、明の建國の基礎こゝに定まるとせられて居るが、右の實錄の記事には此時より既に律を定めんことを議すとある。次で至正二十七年(即ち吳元年)九月には平江に據れる強敵張士誠を斃し、楊子江沿岸一帯の地は太祖の手中に歸したので、いよいよ法律制定の必要に迫られて來た。乃ち此年十月壬子(九日)には御史臺及び各道按察司が設置されたが、さしあたり此等糾察官の依據すべき法律を必要としたので、翌々日甲寅(十一日)には「成法を頒ち内外をして遵守せしめんと欲して」中書省に律令撰

定を命じ、十二月甲辰(二日)に出来上つてゐる。僅に五十一日間で撰定を了へた譯である。

この律令の頒行に就ては、實錄には上掲の十二月甲辰の條に律令成。命頒行之。とあるのみで、其他に別段の記事は見えぬのであるが、現存の明令の卷首に載せられたる律令頒行の聖旨の日附によつて洪武元年正月十八日が頒行の日なることを知る。昭代典則、明紀等の編年書は實錄に本づき、別に頒行の時期を記して居らぬが、皇明從信錄は洪武元年正月の條に大明令頒行の記事を載せてゐる。この記事は恐らく右の明令所載の聖旨に據つたものと思はれるもので、單に令の頒行のみを記してゐるが、聖旨の文面に依れば律令共に此時頒行されたものと思ふべきであらう。明會典萬曆本に據るには大明令の條文を他の洪武元年の法令と同じく洪武元年令として收載してゐる。但だ現存明令の條文が、會典に往々洪武二年令として收載せられてゐるが、未だその理由を詳にせぬ。

撰定に與つた總裁官及び議律官の銜官名氏は上掲實錄の文に見えてゐるが、後に述べる北平人文科學研究所に藏せる明令の舊鈔本の卷首には左の如く銜名を列記して居り、實錄の記載より更に詳しい銜官を知り得る。但だ文字の訛脱がかなりある。實錄と相異の文字は○を附し、脱落に屬するものは□を以て圍む。

總裁官

議律官

中書省

中奉大夫中書參知政事兼太子詹事丞

臣楊慈

中奉大夫中書參知政事兼太子詹事丞

臣傅玘

奉議大夫中書右司郎中

臣徐岑

御史臺

嘉議大夫治書侍御史兼太子賓客 臣文原吉

嘉議大夫治書侍御史兼太子賓客 臣范顯祖

奉訓大夫御史臺經歷 臣錢用壬

承事郎監察御史 臣盛原輔

承事郎監察御史 臣吳去疾

承事郎監察御史 臣趙麟

承事郎監察御史 臣崔永泰

承事郎監察御史 臣張紀成

承事郎監察御史 臣謝如心

太史院

太史令兼太子率更令 臣劉基

翰林國史院

翰林學士 臣陶安

大理司

大理卿 臣周禎

大理少卿 臣劉惟敬

大理丞 臣周湏
大理評事 臣陳敏
大理評事 臣孫忠
按察司

嘉議大夫浙江等處提刑按察使 臣李祥
嘉議大夫江西湖東道提刑按察使 臣潘黼
嘉議大夫湖廣等處提刑按察使 臣滕毅
奉議大夫兗浙江等處提刑按察司事 臣劉承直
奉議大夫兗浙江等處提刑按察司事 臣程孔昭
奉議大夫兗浙江等處提刑按察司事 臣傅敏學
奉議大夫兗浙江等處提刑按察司事 臣王藻
奉議大夫兗湖廣等處提刑按察司事 臣遼永貞
奉議大夫兗湖廣等處提刑按察司事 臣張引
奉議大夫兗湖廣等處提刑按察司事 臣吳昭

右の列銜には何故か總裁官の下に李善長の銜名を缺いてゐるが、之に就て仁井田陞博士は嘗てこの舊鈔本明令を紹介された際に、若し鈔本若しくはその原本たる板本の脱落にあらずんば、李善長が反逆に坐して誅せられた人である故、削つたのかも知れぬといふ意味のことを述べられてゐる。

東方學報東京第五冊續
篇「採訪法律史料」七

議律官の人数は實

録では二十八人であるが、鈔本明令では按察司僉事劉承直が一人多く、二十九人である。明史刑法志に二十人とあるは誤りであらう。議律官の名氏の異同の中、楊憲・傅瓚・徐本を鈔本明令に楊慈・傅玳・徐岑に作れるは誤りである。楊憲・傅瓚は明史藝文傳あり、徐本の名は實錄の他の箇所に
も見ゆ。李王家本此條（李朝法典考所引に據る）徐本に作る。實錄の張純誠亦如此。李王家本吳彤に作る。月の條に山東按察司僉事吳彤あり。が鈔本明令に張紀成・吳昭となれるも、恐らく實錄が正しいのであらう。たゞ鈔本明令の王藻が實錄に正藻となれるは實錄の寫訛であらう。李王家本王藻に作る。謝如心は實錄洪武二年七月癸丑の條では謝恕に作つて

ゐる。なほ明史周楨傳には、劉惟敬を刑部尙書を以て洪武七年律の更定に當れる劉惟謙と混同してゐるが、これはその名の異なる如く別人であることは、實錄に就いて兩者の官歴を調べれば明かである。

次に銜官の相異せるものを舉ぐれば、劉基は實錄の記事では御史中丞として御史臺の官の首に置かれてゐるが鈔本明令では太史院の官として太史令兼太子率更令と見えてゐる。これは如何なる理由であるか。鈔本明令の列銜中には劉基の外にも太子の官を兼ねたる者を見るが、實錄等に據れば洪武元年正月東宮官を立つるや別に府僚を設けず、此月辛巳（十日）李善長以下の重臣をして兼官せしめたところから、鈔本明令の銜官は此日以後のものでなければならぬ譯であり、即ち正月律令の頒行された際のものであることが推知せられる。一方實錄の銜官を観るに、李善長は左丞相となつてゐるが、實錄洪武元年正月乙亥（四日）の條には李善長・徐達を左右丞相と爲すと見え、従前左相國たりし李善長は此時左丞相と改められたのであつて、實錄の他の記事に於ける李善長の銜官は、大體此時以前に於ては左相國、以後に於ては左丞相と正しく記されてゐることから推して、實錄の律令撰定の記事には後の官名に依つて追記されたものゝあることが知られる。果して然らば劉基の場合に就てもかゝることが考慮されねばならない。劉基の太史令と爲つたのが——任官の日は明確でないが——律令撰定の命ありし以

前にあることは、諸書の記載に徴して明らかなのであるが、その御史中丞に任ぜられたる時期に就ては諸文獻の記す所が區々である。實錄には律令撰定の命ありし直前吳元年十月壬子（九日）御史臺設置の記事に於て、劉基を——章溢と俱に——御史中丞と爲し、劉基は従前の太史令を兼ねしむと記し、以後の記事に於ては多く御史中丞劉基と書して居る。之に據れば御史臺設置と同時に御史中丞に任ぜられしものゝ如くであつて、實錄の律令撰定の記事とも矛盾せざる如く見える。然るに宋濂の撰せる章溢の神道碑二宋學士文集（翰苑前集卷二）及び皇明文衡卷七十には、洪武元年正月太祖は帝位に即き大廟に事ありし翌日（五日）章溢と劉基とを召して奉天殿に御し、群臣の前に於て其功を歴陳し並びに御史中丞に拜し、章溢は辭したるも允さず、といふことが見えて居り、實錄洪武二年五月辛酉條の章溢の傳記にもその事見ゆ。又黃伯生の撰に係る劉基の行狀皇明文衡卷六十二に徴するも基の御史中丞任命は洪武元年正月以後にあるものゝ如くである。更に又、誠意伯（劉基）文集卷二には前太史令兼太子率更令劉基に資善大夫御史中丞兼太子贊善大夫を授けたる誥命が御史中丞誥と題して收載されてゐるが、その日附は洪武元年三月□日となつて居り、これ等は何れも實錄の記事と合しない。たゞ皇明從信錄は編年の體を持するに嚴であつて、努めて實錄の如き追記的筆法を避け、吳元年律令撰定の記事に於ては李善長を左相國と記すと共に、劉基は太史令と書し、又章溢の御史中丞任官を洪武元年正月四日の條に繋げ、神道碑の記事と一日を違ふ。劉基の御史中丞任官は三月に繋げてゐる。誥命の日附と合す。さて右の如き劉基の御史中丞任官の時期に關する異説の中、實錄の之を吳元年十月に繋ぐるは、上述の如く實錄には追記的記述を含む故、尤も不確實のものと云はざるを得ない譯で、今假りに之を措くも、その洪武元年正月にありや三月にありやは猶疑問の存する所である。從信錄が之を三月に繋けたるは誥命と合し、又鈔本明令の列銜に御史中丞とせざることも符合し、最も正しきに似たるも、一方誥命を受けざる以前より任官せることも考へられるから、神道碑

の記事に據つて正月五日を任官の時と解することも出来、更に又、それ以前には絶対に溯り得ぬとも斷言出来ない。若し正月若しくはそれ以前にありとすれば、鈔本明令の列銜に太史令として御史中丞とせざりしは、未だ正式に辭令を受けざる故繋銜するを得ざりしものと解することも出来る。要するに當時國家草創の際のことでもあり、現存の資料を以てしてはこの邊の事情は頗る明確にし難いものがある。猶ほ鈔本の列銜によれば、劉基は太史令を以て太子率更令を兼ねてゐるが、これも實錄には前述の洪武元年正月十日重臣に東宮官を兼ねしめたる際御史中丞劉基——及び章溢——は贊善大夫を兼官したこととなつてゐて、合しない。從信錄は此日章溢は贊善大夫、劉基は率更令を兼官したることとなし、劉基の贊善大夫任官の事をその御史中丞任官の記事と同じく三月に繋げてゐる。前述の誥命によつて、劉基の兼官が太子率更令より贊善大夫に遷つたこと、並びにその辭令を受けたるは三月にあることは明かであるが、率更令並びに贊善大夫任官の時期も亦未だ之を明確にするを得ない。實錄には率更令任官のことに就ては一言も記すところがない。

太祖は法律制定には餘程熱心であり、且つ自己の體驗に基く強い自信を持つてゐたやうで、初頒律令撰定に當つても自ら裁斷するところ多かつたことは上掲實錄の文でも知られる。一體この律令は條文の數も少く、簡明を主とし、暫定的に作られたものであるが、令はこれ以後更定を見ず、令的法規は種々別行の法典として出ることゝなつたに反して、律は實錄によればこの後間もなき洪武元年八月己卯の條に「上念律令尙有輕重失宜。有乖中典。命儒臣四人。同刑部官講唐律。日寫二十條。取進止。擇其可者從之。其或輕重失宜。則親爲損益。務求至當。」といふ記事も見え、唐律を講究し、此後太祖一代に亘つて數次の改修を行つて完璧を期した。明の丘濬は大明令を目して、漢の高祖が入關して法三章を約し、唐の高祖が京師に入つて法十二條を約せると同一意なりと云

つてゐるが、大學衍義補卷百三 太祖が必ずかくの如き速成の法を作らねばならなかつたのは、その帝位に登らんとする

に當り、元の法律を改め、中華的法制を再建するの主義を明らかにし、人心を新にせんとする目的のあつたことは云ふまでもない。太祖は元の通制條格の繁冗を排し、簡明の法を立てんと欲した趣意は上掲實錄の文にも見えてゐるが、律令撰定中に於ても更に簡と嚴とを旨として立法すべきことを訓示して次の如く云つてゐる。蓋し元法が繁冗にして且つ弛緩せるを改めんと欲したのである。

上謂臺省官曰。近代法令極繁。其弊滋甚。今之法令。正欲得中。毋襲其弊。如元時條格煩冗。吏得實緣出入爲姦。所以其害不勝。且以七殺言之。謀殺・故殺・鬪殺・既皆死罪。何用如此分折。但誤殺有可議者。要之與戲殺・過失殺亦不大相違。今之法正欲矯其舊弊。大槩不過簡嚴。簡則無出入之弊。嚴則民知畏而不敢輕犯。爾等其體此意。實錄吳元年十一月壬寅の條

太祖は又法律が専ら胥吏の手にあつて、元に於ては殊にその弊甚しかりしことを改めんとして、士大夫をして法律に通ぜしむることに頗る努力してゐるが、同時に庶民にも法を知らしめんと欲して種々の方法を講じてゐる。律令制定と同時にその解釋書たる律令直解を頒つたこともその一である。その事は實錄吳元年十二月戊午（十六日）の條に次の如く見えてゐる。

戊午命頒律令直解。先是上以律令初行。恐民一時不能盡知法意。或有誤罹于法者。乃謂大理卿周禎等曰。律令之設。所以使人不犯法。田野之民。豈能悉曉其意。有誤犯者。赦之則廢法。盡法則無民。爾等前所定律令。徐禮樂制度錢糧選法之外。凡民間所行事。宜類聚成編。直解其義。頒之郡縣。使民家諡戶曉。至是書成。以進。上覽而喜曰。前代所行通制條格之書。非不繁密。但資官吏弄法。民間知者絕少。是弊替天下之

民。使之不覺犯法也。今吾以律令直解徧行。人人通曉。則犯法者自少矣。

二 明令の形式・効力・法源

明令は周禮の六官に由來する吏戶禮兵刑工の六部によつて分たれてゐるが、令のみならず初頒律も同様に六分されてゐた。律は其後洪武七年律に於ては唐律の篇目に倣つて十二篇としたが、洪武二十二年更定に際して再び六部の目を復し、名例律と併せて七篇となし、以後清律に至るまで之を踏襲せるは周知の如くである。この律令の六分法と關聯して直ちに考へられるのは、明朝に於て行政機構の中心を爲せる六部のことであらう。明は國初、元制に倣つて中書省を置き、中書省には最初たゞ四部を設けたが、洪武元年八月に至つて六部を備置した。其後洪武十三年中書左丞相胡惟庸の謀反を誅滅せる機會に中書省を廢止し、以後官制上宰相を置かぬこととし、六部を天子に直屬せしめ、六官が行政官として天子に直屬するといふ周禮の理想による制度を、支那官制史上に於て始めて實現せしめた。明律が洪武二十二年の更定に於て六分法を取れるは正にこの官制改革と合致して居り、されば沈家本は重刻明律序に「迨洪武十三年懲胡惟庸亂政。罷中書省而政歸六部。律目亦因之而改。千數百年之律書。至是而面目爲之一大變者。實時爲之也。」と云つてゐるのであるが、但だ氏がこの文の直ぐ前に「考律書之篇目。……北齊定爲十二篇。隋開皇律稍變通之。唐宋下迄明初。皆遵用其篇目。蓋六部本屬中書。故律書未嘗以六部分。」と云つてゐるのは、洪武元年律が六分法を取れるを無視せるものゝ如くで、不正確の言と云はねばなるまい。最初の律令が六分法を取れるは洪武十三年の官制改革以前、更に洪武元年八月中書省に六部を置く以前のことに屬する。かく明の律令が夙に六分法を取つた理由は種々に考へられることであつて、是より先、法典として六分法を取れるものに、沈家本も「隱に明律六部分列の權輿となつた」律目と稱してゐる元典章と考へ、吏戶禮兵

刑工の目があり、經世大典中には周禮の六典の流を汲む臣事六篇治典・賦典・禮典・政典・憲典・工典があり、此等の影響は當然考へられ、又條文の數の少い、殊に明令の如き小法典には煩瑣な篇目は不適當でもあるが、一には太祖がかねてより周禮六官の制の簡明なるを理想とせるによるものとも解せられる。太祖は洪武元年正月戊寅中書省の臣に諭して「……天子總六官。六官總百執事。大小相維。各有攸屬。是以事簡而政不紊。故治。秦用商鞅。變更古制。法如牛尾。暴民甚而民不從。故亂。卿等任居宰輔。宜振舉大綱。以率百寮。贊朕爲治。」太祖實錄と云つてゐる。

現存明令の條文は吏令二十條、戶令二十四條、禮令十七條、兵令十一條、刑令七十一條、工令二條、凡て百四十五條で、實錄の記載と合する。洪武元年律は今佚して居るが、實錄によれば吏律十八條、戶律六十三條、禮律十四條、兵律三十二條、刑律一百五十條、工律八條、凡て二百八十五條である。律令ともに刑の部に最も條文の數が多い。これは法律を六部に從つて分類すれば、自然かくなることであるが、但だ刑令の條文の特に多いのは特別の理由がある。一體明令の條文には、唐律などでは律に屬すべき規定が多く含まれて居り、殊に刑令の中に最も多い。これは令と同時に制定された初頒律に名例律を缺いて居るのと相關聯して考ふべきことで、初頒律令に於ては名例的規定は令の中に存してゐるのである。唐律の篇目に倣つた洪武七年律には名例律を一篇として設けることゝなつたが、此時明令中の律的規定を律に——その大部分は名例的規定を名例律に——入れ、唐律の傳統に復したのである。次にその事を今少し詳しく説明しよう。

宋濂の撰にかゝる洪武七年の進大明律表に、

篇目一準之於唐。曰名例。曰衛禁。曰職制。曰戶婚。曰廩庫。曰擅興。曰賊盜。曰鬪訟。曰詐僞。曰雜律。曰捕亡。曰斷獄。采用已頒舊律二百八十八條。續律一百二十八條。舊令改律三十六條。因事制律三十一條。

授唐律以補遺一百二十三條。合六百有六。分爲三十卷。

隆慶二年杜氏刊大明律例附解・本邦延享七年刊明律所載の此表は並びに雜律を雜犯に作り、宋學士文集・皇明文衡所

載の者は雜律に作る。

とて、洪武七年律の六百六條の成立を記して居る。その採用已頒舊律二百八十八條とあるは、云ふまでもなく洪武元年律の二百八十五條より採りて二百八十八條としたのであるが、舊令改律三十六條は明令より取つて三十六條の律條を作つたといふことである。洪武七年律は佚して見るを得ないから、この三十六條を正確に知るに由ないが、現在の流布本たる洪武三十年頒行の律と明令とを對照しても、明令より入れる法規は大體推知され得る。洪武三十年律は洪武七年以後、更に洪武九年、二十二年の更定を経たもので、條文の數も其間に六百六條より四百六十條に減じてゐるが、これは多くは條文の併合に因るものと考へられ、法規の内容に於ても此間に多少の増損變更はあつたことは明かであるが、全般的なる大變更はなかつたものゝ如くである。今この洪武三十年律中に於て、明令より入りたりと思はるゝ規定を含む條文を示せば次の如くである。匆卒に檢出したので正確を保し難いが、敢て參考に供することゝする。

明令

明律

吏令 公事自覺改正 名例律 公事失錯

戶令 和顧和買 戶律倉戶 出納官物有違

解納官物 同 轉解官物

兵令 軍情 兵律軍政 申報軍務 飛報軍務

告給路引 兵律關津 詐冒給路引

刑令		五刑	名例律	五刑
十惡	同	十惡	應議者犯罪	
八議	同	八議	應議者犯罪	
贖刑	同	五刑	老小廢疾收贖	犯罪存留養親
元告合就被告	刑律訴訟	告狀不受理		
訴訟	同	越訴		
二罪俱發	名例律	二罪俱發以重論		
婦人犯罪	同	工樂戶婦人犯罪		
犯罪自首	同	犯罪自首		
職官犯罪	同	文武官犯公罪	文武官犯私罪	
盜賊自首	同	加減罪例		
徒流遇赦不還	同	徒流人在道會赦		
親屬容隱	同	親屬相爲容隱		
流囚家族	同	流囚家屬		
計贓估價	同	給沒贓物		
贓物給沒	同	同		
親屬代首	同	犯罪自首		

僧道犯罪	同	除名當差
家人共犯	同	共犯罪分首從
籍沒遇革	同	給沒贓物
軍官犯罪	同	軍官軍人犯罪免徒流 軍官有犯
取受計贓	同	文武官犯私罪
官員家人犯罪	同	應議者之父祖有犯
特旨處決罪名	同	斷罪引律令
頒降律令	同	斷罪依新頒律
老幼犯罪	同	犯罪時未老疾
誣告抵罪	刑律訴訟	誣告
徒役	名例律	徒流遷徙地方
工令 造作軍器	工律營造	造作不如法
織造段匹	同	同

右の中、明令の條文をそのまゝ律に存するは一もなく、一二字を改めたるに過ぎぬものも二三あるが、多くは律に於て詳密を加へ、若しくは法の内容に多かれ少かれ變更を見、且つ法文も整つてゐる。令の數條が律の一條中に包含さるゝものあるは前述の條文併合によるもの多かるべく、令の一條は律の一條中の一部分を占むるに過ぎざるものが多い。

猶ほ名例律に就て少しく附言し置くべきことがある。前述の如く名例的規定は最初令中にあつたのを、洪武七年唐律十二篇の目を採用するに至つて名例律一篇を設けることゝなつたのであるが、もと之を唐律の如く十二篇の首に置かずして、斷獄律の次、即ち最後に置いた。これを律の篇首に置くことゝなつたのは洪武二十二年七篇に改編せる際にあることは、實錄の洪武二十二年明律更定の記事に「舊律名例律附於斷獄下。至是特載之篇首。」とあるので知られる。但だこれに就ての疑問は、洪武七年の進大明律表や實錄の洪武六年律更定（洪武七年律）の記事に於ては名例律を十二篇の首に記せるに、明史刑法志や續文獻通考^{卷百三十六}には之を篇末に記し、相符合せることである。沈家本は進大明律表と刑法志と合せざる理由を解釋して、既に律を進上して後に篇末に移したのではないかとしてゐるが、^考律目果して然るか否かは、未だ充分に究明されて居らぬ明律更定の真相と共に、將來の研究に俟たねばならぬ。

明令は明朝一代を通じて法典としての効力を有つてゐたやうであるが、その個々の條規は後出の諸法令によつて改廢せられてゐるものが多いから、最後まで實質的に効力を有つてゐた範圍は餘程狹められてゐたものと見ねばならない。

令條の律に入つた者あることは前述の如くであるが、この範圍に於ては明令は効力を失つた譯である。明律（刑律雜犯）には唐律に倣ひ違令の罰を規定して、

凡違令者答五十 謂令有禁制而律無罪名者

とし、明律集解附例の纂註には之を解して、

國初未制律之前。首著爲令。以頒示天下。分爲六科。吏令自選用以至宣使等凡十八條。……工令則造作軍器織造段疋二條。其間有律條並載者。依律科斷。若律無罪名而令有禁制。則當守令。故違者笞五十。

とあり、即ち律に規定あるものは律に依つて罰し、律に規定なき令條に對してのみこの違令の罰が適用される。又刑法志には、

蓋太祖之於律令也。草創於吳元年。更定於洪武六年。整齊於二十二年。至三十年始頒示天下。日久而慮精。

一代法始定。中外決獄。一準三十年所頒。其洪武元年之令。有律不載而具於令者。法司得援以爲證。請於上而後行焉。

とあり、之に據れば、法司が律に規定なき明令の法規を援引して裁斷を爲すには上裁に俟たねばならなかつたのである。

明令の法規には律によつて改廢せられたものゝ外、後出の條例、諸種の法典若しくは單行の法令によつて改廢せられたるものゝ多かるべきことは、明令の規定を取扱ふに當つて必ず考慮されねばならぬことである。例へば禮令の喪服等差の條に定められた喪服規定は、洪武七年頒行された孝慈錄に於て、齊衰三年の喪を廢し、母及び繼母・慈母・養母・庶子の所生母に對する喪服を父と同じく斬衰三年とする等の大變革を加へられ、以後これが定制となつてゐるが如きである。

前に一言したやうに、明令は國初暫定的に制定せられたまゝで、その後法典として發展しなかつたものであるから、形式的には律令と並び稱するけれども、後に完備した明律と實質に於て比肩するものではなく、その明代法律中に於て占むる地位も唐宋の令の如きものでないことは云ふまでもない。されば丘濬は

斯令也蓋與漢高祖初入關。約法三章。唐高祖入京師。約法十二條同一意也。至六年。始命刑部尚書劉惟謙等造律文。又有洪武禮制・諸司職掌之作。與大誥三編及大誥武臣等書。凡唐宋所謂律令格式與其編敕。皆在是也。但不用唐宋之舊名耳。大學衍義補卷百三

と云つてゐるが、かく令式に代るべき種々の法典が出来たことは遂に明會典その纂輯書は諸司職掌・皇明祖訓・大誥・大明令・大明集禮・洪武禮制・禮儀定式・稽古定制・孝慈錄・教民榜文・大明律・軍法定律・憲綱の如き綜合的法典を欲するに至つた一の理由である。

なほ明會典に明令の條文を洪武元年令・洪武初令・洪武二年令等として收載してゐる外、明律注釋書の多くは明令の條文を附載若しくは引用してゐるやうである。余の調べたのは大明律例附解隆慶二年孟夏池陽郡杜氏象山學舍重刊本及び王肯堂の律例箋釋の二書に過ぎぬが、二書俱に律條の後に關係の令條を附載して居る。その附載の箇所及び附載條文は必ずしも同じでなく、注釋者が各自見る所によつて擇び採つたものゝ如くである。王肯堂箋釋の康熙二十八年若しくは卅年の序ある顧鼎定刪修本は之を削る。但だ現在最も流布せる明律集解附例には之を附載してゐない。

明の太祖は元の法制を嫌忌して中華的法制の再建に努力し、律に就ては洪武元年律よりして「唐に準じて之を増損す」といふことが見えてゐる。實錄上掲然るに現存の明律中には元の法律を踏襲せる法規の存することは、薛允升の唐明律合編なども之に注意し、我が有高巖博士は「元代の婚姻に關する法律の研究」東京文理科大学文科紀要第十卷中に、唐律に全く無くして元史刑法志の或條文と共通せる明律の條文三十有餘を列舉して居られる。明律が元の法律を襲用せざるを得なかつたのは、時宜によつて法を制する上から云へば當に然るべきことであるが、明令に於ても同様の事實が存在するであらうことは自ら推測され得ることである。況んや明令に就ては律の如く唐に準じたとい

ことも記されてゐないのである。

一體洪武元年律令の形式からしても、元の法律との類似が認められ、延いては關係が考へられる。元年律令の六分法が元の法典よりの影響を考へしめることに就いては既に一言したが、其他に於ても、名例律が律に入らずして令中に含まれたることも、類似を大元通制に求めることが出来る。安部健夫學士の「大元通制解説」（東方學報京都第一冊）

に従へば、大元通制中の條格は「令的法規を主として他に若干の格的・式的法規を包含する一種の行政法典」

その篇目は祭祀・戸令・學令・選舉・宮衛・軍防・儀制・衣服・公式・祿令・倉庫・廐牧・關市・捕亡・賞令・醫藥・田令・賦役・假寧・獄官・雜令・僧道・營膳・河防・服制・站赤・權貨であり、斷例は「判決例

（決斷事例）と律的法規（決斷通例）とを包括する一種の刑法典」その篇目は衛禁・職制・戸婚・廐庫・擅興・賊盜・鬪訟・詐僞・雜律・捕亡・斷獄であつて、

この斷例及び條格の篇目はそれ／＼金の泰和律及び令の篇目を模倣して少許の變更を加へたものであるが、泰和律に存する名例篇が斷例に無いのは、刑統賦疏に「斷例は即ち唐律十二篇、名例は獄官に提出して條格に入る」と見え、大元通制にては名例篇は條格中に包含されてゐるのである。洪武元年律に名例篇なく、名例的法規が明令中に存する理由は、この事實と考へ合ふことによつて理解され、太祖が頻りに攻撃せる通制條格が即ち明令制定の際に於ける最も有力なる法源であつたことが推測される。

更に個々の條文に就いて見ても、明令中には通制條格乃至元典章の條文に酷似せるものあるを發見する。例へば次の如きものである。

通制條格卷八儀制、至元八年十一月十五日聖旨

明令禮令、公服

凡文武官員公服各依品從不得僭用

一公服俱右衽 上得兼下下不得僭上

一公服俱右衽

壹品官紫羅服大獨斜花直徑伍寸

貳品官紫羅服小獨斜花直徑參寸

參品官紫羅服散荅花謂無枝葉者直徑貳寸

肆品伍品官紫羅服小雜花直徑壹寸伍分

陸品柒品緋羅服小雜花直徑壹寸

捌品玖品綠羅服無文羅

一偏帶俱係紅鞋 上得兼下不得僭上

壹品官玉帶

貳品官花犀帶

參品肆品荔枝金帶

伍品陸品柒品捌品玖品俱烏犀角帶

(右の規定は元典章禮部卷二服色の「文武品從服帶」にも見ゆ)

この公服の制を金の公服の制金史典と對照して見ると、元制は金制を襲ひて少變し、明令の制は元のそれに由

來することが知られる。因みに明では間もなくこの制は變更せられた。

通制條格卷十六田令、妄獻田土

大德八年正月欽奉詔書内一款。國家財賦自有常

一品紫羅服大獨科花直徑五寸

二品紫羅服小獨科花直徑三寸

三品紫羅服散搭花直徑二寸

四品五品紫羅服小雜花直徑一寸五分

六品七品緋羅服小雜花直徑一寸

八品九品綠羅服無花紋

未入流品檀褐綠窄衫(條格別の條に之と同様の未入流の制あり)

帶俱用紅鞋

一品玉帶

二品花犀帶

三品四品荔枝金帶

五品至九品烏角帶

未入流品者黑角束帶以上俱展角未入流の制は條幟頭(格別條にあり)

明令戸令、妄獻山場

凡民間賦稅自有常額。諸人不得於諸王駙馬功勳大

制。比者諸人妄獻田土戶計山場窖冶。增添課程。

臣及各衙門。妄獻田土山場窖冶。遺害於民。違者

無非微名貪利。生事害民。今後悉皆禁絕。違者

治罪。

治罪。

（右の規定は元典章聖政卷一抑奔競の條にも見ゆ。なほ通制條格卷三戶令の大德三年正月諸王公主駙馬に戶計地土を呈獻するを禁ぜる聖旨を參照すべし。）

右は特に條文の體裁字句の酷似せるものゝ偶ま目に觸れたるを取つて例示したに過ぎぬが、通制條格（今約三分の一を佚す。）元典章、及び元史刑法志（經世大典の憲典を取つて作られたものとされてゐる。）を精査したならば、必ずや明令が元の法律を踏襲せるものゝ頗る多きことが知られるであらうと思ふ。安部學士は元の法律が元代に於て漸次中華化したる過程を説き、大元通

制が律令風の法典なるを明かにし、明の太祖の「唐宋皆有成律斷獄。惟元不做古制。取一時所行之事爲條格。」

の語によつて蔽はれたる事實の半面を啓明せられたが、（同氏前掲論文）一面に於て太祖の制定した律令が、範を古制に取

らんとしつゝも猶頗る多く元の法律に依據せるを見るは興味あることである。殊に明令の如き、創業の際匆卒に作られたる法典が、さしあたり主として在來の法たる元法の中より抽出され、之を基礎として若干の改革を施し

たものであらうことは容易に想像され、同時に初頒律も唐に準じて増損すと云はれてはゐるが、唐律を講究して

更定された後の律よりは餘程元臭の強かつたものであらうことは、明令中に含まるゝ名例の規定より類推されるであらう。（明令の條文と元典章及び刑統賦疏（賦疏には通例と標して條格・斷例を引く）中に見ゆる當該條文とを參照して知るべし。）明令は唐令を參照したか否かは詳かにせぬが、

明令に就いては何等準據する所を云はず、また明令が遂に令的法典として發展しなかつたこと等から觀ても、恐

らく直接には唐令は参照しなかつたのであらう。明令構成の源流を討究することの如きは、この小文の企及するところではないが、仁井田博士の言を借れば、「令の内容には唐宋金元諸法律と同一性あるものも多い。」博士は就中特に明令の「喪服等差」の條に規定する五服の制に就いて、唐禮にあつて唐令には存しなかつた五服制度が後世法典に入り来る徑路を考へ、その令なる法典の體系に取入れて令條としたことの明瞭なのは金の泰和令よりであつて、その後には明令あるのみであり、明令構成の源流を知るには泰和令も貴重な資料なりとせられた。同氏前掲論文 泰和令に服制令があり、通制條格にも之を承けて服制篇があり、明令の條文が直接には元の法典から來てゐるのではないかと思ふが、未だ詳しくは考へてゐない。

三 明令の傳本

明令の傳本に就ては、既に仁井田博士の所説に要領は盡されて居るが、採訪法律史料七 今こゝには便宜上重複を厭はず述べることにする。太祖實錄洪武六年四月戊戌に律令即ち初頒律令 憲綱を重刊して之を諸司に頒つと見えてゐるから、是より先既に律令の刊本があつた譯である。周弘祖嘉靖三十八年進士の古今書刻によれば、明令の單行刊本は嘉靖頃までには内府本、南京國子監本、福建本（延平府本及び書坊本）等の官本及び坊刻本のあつたことが知られる。梅鷟の南雍志經籍考によれば嘉靖中南京國子監に藏せる刻板に大明令一卷共六十一面。脱第十六一面。洪武元年正月十八日頒行。分爲六類。があつた。これら明令の明刊單行本の傳存するものあるや否やを知らぬが、余は昨春天津に故李盛鐸氏を訪ひ同氏の藏書を觀たる際、同家の書目中に大明令一卷（明刊黑口本）とあるを見たので、一見を請うたが、當時同家では善本の類を數十箇の匱に詰め込みありて遽に取り出で難かりし爲め、遂に見るを得なかつたのは遺憾であつた。然るに北平人文科學研究所には前に一言した明令の舊鈔本があり、これは仁井田氏も云はれてゐる如く、明刊本の形式を

傳へたものと見られるものである。卷首に洪武元年正月十八日の聖旨を載せ、次に前に掲載した總裁官及び議律官を列し、次に目録、次に本文があり、巻尾には歲月を記して「萬曆三十二年十月 日」とあり、最後に當時の校刻關係者と思はれる都察院の官を左の如く書してゐる。

太子太保都察院左都御史 臣 溫 純

左副都御史 臣 詹 沂

左僉都御史 臣 趙 士 登

經歷司經歷 臣 張 嘉 言

都事 臣 劉 際 炎

司務廳司務 臣 王 廷 俊

臣 郭 慶 年

照磨所照磨 臣 郭 良 翰

檢校 臣 蕭 良 命 重

溫純は萬曆中左都御史たること明史卷百二十本傳に見えてゐる。最後の蕭良命の下は重校か何かの一字を脱してゐるのであらう。之に據つて萬曆刊本のあつたことが推測されよう。卷首の銜名及び巻尾の年號・銜名は後述の大藏永綏本・羅氏陸庵叢書本・皇明制書所收本・安部學士所藏の元文三年鈔本には見えぬところで、余は此鈔本に於てのみ見たので、珍らしく思ひ特に掲載したのである。なほこの鈔本の目録は「律令目錄令一百四十五」と標し、元文鈔本を除く他の諸書に「大明令目錄」とあるのと異つてゐる。

元文鈔本には「律令目錄」とあるが、但だ「令一百四十五」はない。これ

は此書が律令合編本より出で來つたものなることを思はしめる。律令合編乃至合刻本が存在したといふ確證は未だ發見しないが、最初は——殊に律の未だ更定されない洪武元年律令などは合編されたぐらうといふことは想像に難からざるところである。文淵閣書目の國朝の部には「律令條目一部」といふものがあるが、如何なる書か明瞭でなく、又、世善堂書目には「大明律令三十卷洪武元年定」と見え、卷數が多過ぎるやうにも思はれるが、若しこれに誤りがなければ合編本の證となし得る。人文科學研究所の鈔本は振綺堂乾隆時の藏書家汪憲の室名の舊藏本であつて印記あり、振綺堂書目の鈔本史類に「明令一冊一卷明楊慈等議」と著録されてゐるのが即ちこれである。なほ明末の千頃堂書目には「大明令一卷高帝命楊慈劉基陶安等裁定、分六曹、凡一百四十五條、洪武元年□月十八日頒行」がある。この注記を見るに李善長の名を挙げず、楊憲を楊慈に作つてゐる點からして振綺堂本と同一種の本なることが知られるが、兩本の關係まではもとより分らない。

其他現存の刊本では皇明制書所收本及び羅振玉氏が陸庵叢書の一として刊行した單行本があり、本邦には延享四年大藏永綏の校刻した單行本がある。鈔本としては安部學士が、大藏本刊行より九年前なる元文三年の奥書ある鈔本を所藏せられてゐる。大藏本は永綏の序に「其の體式一に舊刻に循ふ」とあるが、その舊刻が如何なる本なるかは不明である。この校刻本は明會典、刑書據會、明律箋釋王肯堂の律例箋釋なるべし所載の明令條文を以て校勘し、校語を欄外に標記してあるが、往々「某一作某」とあるを見れば、明令の異本とも對校したやうである。但だ律例箋釋に就いて調べて見たところによれば、校勘の結果、異同を悉く記したのでなく、意を以て是なるものを選択したものであることが分る。又この書を皇明制書本及び元文鈔本を以て校するに、この書に箋釋及び會典に據つて補入すとある文字は皇明制書本・元文鈔本には皆あり、又この書が本文に作れるを、校語にそ

の注なるべきを疑へる處は、兩本には正しく注に作り、其他にもかなりの異同がある。尤も皇明制書にも數種の刊本があり、その所收書にも出入があるが、余の校したのは直隸鎮江府丹徒縣刊の十四卷本近衛文庫藏である。皇明制書本と元文鈔本との間にも異同があり、兩者は別系の本であると思はれる。元文本は筆蹟拙く誤字も多いが、注意すべき本である。此本の目録は、その本文には存する九項を脱落してゐるが、戸令の「指腹爲親」と「解納官物」との間に、皇明制書本・大藏本等には無き「僧道田糧」の一項がある。然るに本文では、指腹爲親の條の次に空白があつて、解納官物の條の「布貨等物本」までを缺いて居り、この空白の處には、鈔寫の際のものと思はれる附箋に「本紙にも此間摺削不見之御座候」と記してゐる。これに就て連想されるのは、前記の南京國子監の刻板が六十一面中の第十六面を脱すことと、この鈔本の空白の位置が略ぼその見當に近く、或はこの國子監本の系統でないかと思はれるのである。何れにしても、元文本の目録に「僧道田糧」の一項が多きことは、目録の標題に「律令目錄」とあることと共に注意すべきことである。人文科學研究所本に「僧道田糧」が如何になつてゐるかは、目下橋川時雄氏に調査を依頼してゐるが、その結果に依つて更に考へて見たく思つてゐる。羅氏の陸庵叢書本も本くところを記してゐないが、之を大藏本と對照するに、その大藏本を重刊し、その校語を擇取して本文を改訂したるものなることは殆んど疑ひなく、萬一然らずとするも大藏本の上に出づところなきものである。

なほこゝに附言すべきは、現存の明令が最初頒行の時のまゝのものであるか否かといふ疑ひである。先づ、皇明制書本・大藏本等に「僧道田糧」一條を脱してゐるものとすれば、此等の本の條文數が實錄等に記す所と符合することに對して疑問を生ずる譯である。刑令「誣告抵罪」の條は、皇明制書本・大藏本・元文本皆二條の體裁

になつてゐるが、二條中の後の一條には、三書並びに冒頭の「凡」の字がなく、皇明制書本・元文本の目録には此條の目の下に大藏本に見る如き「二條」の字がないことなども疑問を提供する。又皇明制書本・大藏本には兵令「急遞鋪兵」の條に「互見職掌兵部」といふ注があり、元文本にはなし兵部職掌皇明制書所收には同事項に關する規定が多少内容を變じて見えてゐるが、六部職掌を定めたのは洪武五年であるから、この注記は後の附加物で、皇明制書の如き諸司職掌等との合刻本に由來するかも知れぬのである。又諸書に大明令として引かれてゐる文に現存明令にないものがある。大明律例附解の吏律職制「姦黨」の條の解に大明律直引を引きて、

按直引謂。凡姦邪進讒言、左使殺人者。遇大赦不在原免。大明令云。暗邀人心者。會赦亦不原免。略下

とあり、又吏律公式「講讀律令」の條の注に、

依大明令。每俸一石折錢一百文。

又同じく公式「照刷文卷」の條に律解辯疑を引き、

按辯疑云。俸錢准大明令。每米一石該鈔一百文。

と見えるが、何れも明令になき文であり、又律例箋釋の「講讀律令」の條の箋釋にも、

依大明令。民官月俸。錢米相兼。罰俸止罰俸錢。每俸一石折錢一百文。

とあり、この文の一部は刑令「軍官罰俸」の條、

凡民官月俸。錢米相兼。罰俸止罰俸錢。軍官月支全米。如遇罰俸。合與民官一體扣算。追罰俸錢。

に見えるが、「每俸一石折錢一百文」の文は見えない。これらは何時か明令より削られたのであるか、詳しくは後考を俟ちたい。又明史禮志には「服紀。明初頒大明令。凡喪服等差。多因前代之舊。洪武七年孝慈錄成。圖列於

大明令。刊示中外。」とあるけれども、現存の明令には喪服圖はなく、明律には喪服圖を載せてゐる。

明令は國史經籍志には著録されてゐるが、明史藝文志、四庫提要並びに之を録せず、其他清朝の書目には振綺堂書目、孝慈堂書目等一二のものに見えるのみで、傳本は甚だ稀であつたやうである。されば、薛允升の唐明律合篇に明令を引くも、僅かに律書附載の條文に依り、沈家本は明令單行本を以て佚書と考へ、大明律讀法に引く所を輯めて一卷を成すべしとなしてゐる。

沈寄修先生遺書歷代刑法考律令九大明令の條參照

楊鴻烈の中國法律發達史には淺井虎夫氏の「支那

に於ける法典編纂の沿革」によつて、たゞ大藏本の存在を知るも之を見ざる爲めに、淺井氏の「支那法制史」に載せたる明令の喪服制を明制に非ずと疑ひ、たゞ淺井氏が之を明令より取れることを云はず、且つこの明初の制のみを擧げて明制とせるは不念といふべし。陳顧遠の「中國法制史」にも、藝文志に録せざれば當時已に佚散し、たゞ東瀛なほ刻本あるのみとし、孫祖基の「中國歷代法家著述考」もたゞ陸庵叢書本を知るのみである。

大藏永綏（龍山と號す）は校刻明令序に日田大藏永綏と自署してゐるので、豐後の日田の人なることが知られるが、その傳は未詳である。廣瀬淡窓、旭莊を出した日田郡には、古く天武天皇の孫大藏卿鈴鹿王の子で、平城天皇の御代に豐後介となつた中井王より出づる豪族大藏氏があり、その家は永享嘉吉の頃まで相續したといふことであつて、代々永字を名につけて居る。日田郡史に據る 徳川時代には大藏永綏より後の人に農學者大藏永常がある。永

綏のことも郷土では知れてゐるかと思ひ、日田のさる郷土史研究家に問ひ合せたが、よくわからぬといふことであつた。しかしこれは尙ほよく調べて見たいと思つてゐる。なほ徳川時代に於ける明令に關する著述には永綏とほゞ同時代の高瀬忠敬（號學山）の明令考一卷、永綏より後に曾我部元寛（號容所）の明令國字解二卷があるが並びに未見である。大藏永綏が明令を校刻した趣旨はその自序に見える如く、當時明律の學が盛んで明律の刊本は流

布したるが、之と參稽すべき明令の刊本なきを慨した爲めである。明令に關する論文には上來屢々引用した仁井田博士の文の外に淺井虎夫氏の明令考史學雜誌第十 六編第六號がある。

四 明令の重印に就て

このごろ東洋史研究會に於て東洋史研究叢刊第二として明令を重印せんと議があり、仁井田博士が亡父に贈られた大藏本に據つて重印することとした。重印本は、原書が二冊に分裝されてゐるのを合して一冊としたる外、行數字數等の體裁はすべて原書に従ひ、原書の誤字誤讀等もそのまゝとした。校勘記を作りたいと思つたが、その暇がないので他日に譲ることとし、たゞ皇明制書本・元文鈔本との異同表を附することとした。印行の役には主として今西春秋君と同君令妹が當られた。皇明制書本はもとより、大藏本、陸庵叢書本と雖も既に稀觀書となつてゐる際、この重印本が學者に裨益するところあらば幸甚である。余の解説の如きに至つては匆卒に起草する所、もとより博雅の君子の叱正に俟つこと大である。

附記

本稿印刷中、明末の查繼佐の罪惟錄(四部叢刊三編所收)中の明令に關する記事に氣附いたので補足して置く。同書太祖紀には(吳元年)十一月詳定律令とある。これは本文では言及しなかつたが、皇明從信錄にもやはり十一月命中書省詳定律令云々とあつて、並びに太祖實錄にこの事を十月甲寅(十一日)に繋げてゐるのと違つてゐる。孰れが是なるかを知らぬが、姑く實錄に従つて置く。又同書太祖紀洪武元年正月の條及び藝文志洪武元年の條には頒大明令於天下とあり、刑法志には洪武元年中書省御史臺進所脩大明律令、頒行とある。これも皇明從信錄洪武元年正月の條に中書省御史臺臣進所修大明令、命頒行天下とあるのと同様で、たゞ刑法志に律令とあるのが異つてゐる。同書刑法志にはまた(洪武)五年、禮部尙書陶凱言、古違令者加以律、律與令相表裏、令律已行、而令仍缺略未備、隨定大明令、不果行。といふ記事が見える。